
谷口壮の奮闘

きっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

谷口壮の奮闘

【コード】

N3496E

【作者名】

きつこ

【あらすじ】

恋に仕事にまっすぐ生きる、普通のサラリーマン谷口の奮闘記。
テンション若干高め。

谷口と先輩

この会社に入って感謝していることがある。
久々にドキドキが込み上げる女性に出会った。

この部署に自分を配属してくれた人事部ナイス！

彼女は3つ上の先輩だ。

クールで仕事が出来る女性。そして後輩想い、特に女子に。粹な先輩。

黒い艶髪が、肌の白さを際立たせる。黒目がちな瞳はいつも凜としている。

でも知ってる。

彼女はああ見えてJ・POPを聴いたり…なんてカワイイところがあるんだ。s-e-t-t-l-eとかAMNESIAとか。

俺も高校生の頃よく聴いてたから懐かしい。

『俺、s-e-t-t-l-eのspraudって曲が好きだったんすよ。彼女にフラれた時の想い出ソングです』

って言ったら、彼女は大きく目を見張った。うるうるした黒目に俺まる写り。

それだけでテンション上がる〜！久々の純情だ。

脳内ハイな俺のことを気にする様子もなく、彼女はパソコンに集中。

指先がカタカタカタカタと鳴る。

一瞬手を休めてカップに手を伸ばす。

一旦口をつけるが『ん？』という表情でカップの中を覗く。
空になってたんか〜超かわいいじゃーん。

ニヤニヤする俺、変態。

彼女が席を立つ。

これは絶対給湯室へゴーだろ！

彼女はカップを持って、俺の脇をすり抜けた。

ハイきたー！！！！

ふわんとした香りが、俺の鼓動を早める。

俺はこの時を待っていたのだ。彼女が一人になる瞬間を。

俺はさつきコピーしたイタリアンのクーポンを掴み立ち上がる。

誘うのだ！誘え俺！！いいか？『めっちゃお得なコースがあるんで行きませんかー？』って軽く言うんだ。さつき給湯室で練習した通りに、自然体で。

彼女、給湯室にイン！

部長もイン！

あー！ー！っ！！！！

やられた。

給湯室から和やかな挨拶の声。が、彼女の声が警戒しているのが分かる。分かりますよ先輩俺には！

あの部長は有名なセクハラ部長なのだ。

もし彼女に手を出すようなことをしたら許さな…

『部長』

彼女の怒気のコもった声。部長が彼女のお尻を撫でた。

あああああっ！本当にしやがった（怒）
が、どうすればいいんだ俺！

『部長、マズイですよ』

部長の手を跳ね除けて、彼女は小声で言う。

『あそこ、天井の点見えます?』

天井を指差す。部長は口をポカンと開けて見上げる。

『人事部があそこに隠しカメラ仕込んでるの知らないんですか?』

え?!?!!

そ、そーなの?!

部長の表情が急に焦りだした。が、俺だってやべーよ!彼女のことを思い出してはここでニヤニヤしたり、誘う練習したり…俺ってやつば変態。それを人事部に全部見られてたなんて…

『こんな小さなことでも騒がれたら大変だから、気をつけてください』

彼女は軽く部長の背中にタッチ。部長は弾かれたような勢いで飛び出していった。

俺はすぐ側のトイレに身を潜めて部長との鉢合わせは免れていたが、思わずトイレから出て、部長を見送ってしまった。

「谷口君?」

背後から突然呼ばれてビクッする。

「あ、あの…あの」

彼女を前にして、俺は慌てる。

「飲み物取りに来たの?」

「は、はい」

「じゃあ、一緒に紅茶にしない?自分だけの為に茶葉を使うのも勿体ないし」

彼女は何事もなかったように、そんなことを言う。

「い、いただきます!」

彼女が紅茶をいれてくれる…ヤバイ、脳血管がきしむぜ。

「あの、志筑^{しじき}さん」

紅茶が蒸れるのを待つ彼女に、思い切って声をかけた。

「お礼に Pasta おごります！ホラこれ！ピザ！！」

あれ？Pasta？ピザ？

慌てふためく俺を、彼女はびつくりした顔で見る。

「クーポンあるし、俺ゴチりますから！！」

彼女が吹き出した。めっちゃ笑っている。

「谷口君」

クーポンをもらってくれた。

「めっちゃお得なコースがあるんで行きませんかー？」

彼女はうる目で俺を見た。

「自然体でって練習してたんじゃないの？」

！！！！！！

俺は思わず天を仰いでしまった、隠しカメラを覗む、が、どこにあるか分からず目が泳ぐ。やっぱり撮られてたか？！

彼女が俺の腕をつかんだ。ビクツとして視線を戻すと、彼女は笑い崩れそうな体で俺の腕にすがっていた。

「谷口君、あれハツタリだから」

え？？

「隠しカメラ」

あ、あ、恥ずかしい俺！恥ずかしすぎる！！

「いいよ」

大パニックの脳内に、彼女の一言がすつと入ってきた。

「いつにする？」

あまりにあっさりとしていたから、俺は思わず言ってしまう。

「これはデートの申込ですよ！」
志筑さんの瞳がキョトンとする。
か、かわいい〜！

「だから、この日はりよ、りよ」
「言っちまえ！」

俺は勢いに任せて志筑さんの手を握った。

「量子りょうしゆさんと呼ばせていただきますから、そこんとこよろしく！」
言っちまった〜〜！

「私、恋人いるけどいいですか？」

どーーーーん。

隠しカメラの前で公開失恋かよっ！っていやいや、カメラはハッタリだったんだっけ。

「やっぱいますよねーそーですよねー」

「うん」

覚悟はしてたけど、正面きって言われると凹むー。でも、でも、
「でもいいっすー！」

憧れるのは自由だろ、いーだろ！

彼女はなんかホツとした表情をした。

「じゃあ楽しみにしてるね」

そして温かい紅茶を渡してくれた。

ううう、なんだろう、フラれたのに爽快感、いい気分。

「…谷口君」

真面目な声。

「コースのお代の他にテーブルチャージがかかるからね、頑張っ
ね」

！！！！

こんなこと忠告されちゃう俺ってどーよ？そしてまんまとノーチエツクだった俺どーよ？

「志筑さん、給料後でお願いします」

「了解」

彼女は軽く手を挙げて、給湯室から出ていった。

かっこいいよ、志筑さん。

マジ惚れる。

谷口と先輩（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございます。
感想などありましたら、一言お願いします！

きつこ

谷口の課題

俺は頭を悩ませていた。

彼女がいてくれた紅茶は大分ぬるくなってしまった。

しかし、ティーバッグではなく茶葉をちゃんと蒸らしていれてくれた紅茶は渋味がなく、冷めても美味しい。

うまいっス、志筑さん。

チラリと時計を見る。

16:20。

今の最大の課題。

それは、彼女とのデートの日にちを決めることだ。

今日は金曜日、今日を逃すと月曜日まで連絡が取れなくなる。だから『給料日後』というあやふやな約束をなんとか確定させたいのだ。給料日は今度の火曜日。俺的には金曜日が希望。せつかくの志筑さんとのデートなのに、次の日のことを心配しながら過ごすなんて嫌だから。

でも金曜日ってな…いかにも期待しちゃってますって取られそうだよな…

だったらいつそのこと給料日当日の方が潔いかな。それはそれで待ってました…って感じがいやらしいかな。

ん…ダメだ、決められん…

よっし!!

俺はメモ用紙に5本の線を引いた。下に火・金・木・火・金と書いて、それが見えないように紙を折る。

実は、最も仕事のやる気が失せる木曜日も候補だったのだ。モチベ

ーシヨンに繋がるかと。

シャツシャツと横線を入れてあみだくじを作る。神様のおっしゃる通りにすれば間違いないだろ。

「クドさんクドさん」

隣の席の工藤さんに声をかける。

「これに横線を加えてくれませんか？」

「あみだつて…随分古典的なことやってんなー」

呆れた口ぶりの割に、丁寧に3本加えてくれた。

「あのさあ…このくるんつてしてる線、意味なくね？」

俺が書いたくるりん線にケチをつける。

さて、

どの棒をにしよう…

ズバツと真ん中にするか。いや、クールな男はそんな直球はかけないはずだ。

ボールペンを握る手が汗ばむ。

「ココにしとけよ」

工藤さんが指差したのは真ん中だった。

「そんな直球行くんですかー?!」

「真ん中が一番左右に振れやすいだろうが」

ああ、なるほど。

「クドさん、ファインプレー」

真ん中にペンでぐりぐりと丸を印す。

行きますっ！

降りてつて右！降りて左！また左！右！右！左！右！左！

「木曜日です！」

「くるりん線使わなかったじゃん」

クドさんは爆笑している。

木曜日です、志筑さん！！

心の声は届くはずもなく、志筑さんはパソコンに集中していた。背筋をピンとして、きれいな姿勢だ。

「クドさん、ご協力に感謝！」

はあ…とクドさんは腑に落ちない顔をしたけど、自分のパソコンに戻る。

時間はいつの間にか16:40になっていた。

返信をもらう時間を考慮するなら、早く送信せねば。

紅茶うまいっすねーなんてフランクな会話から…

「谷口、ちよつと〜」

課長の間延びした声が課内に響いた。

な、なんだよ、会議でいなかったはずなのに…

「なんすか？」

やべ、不機嫌な声だったかな今。

「忙しいとこ悪いんだけど、先日の件部長が直接話してほしいっつ

いうからさ、ちよつと会議室に顔出してくんない？」

はあ？！

「今すぐです…かね？」

「行くよ」

メール1通だけ、と言う間もなく連行される俺。

あらら、あらららら〜

なにがちよつとだよ（涙）

時計は19時を回っていた。金曜日は皆帰るのが早い…志筑さんも

…でも志筑さんって割と遅くまでいたりするんだよね。

なんて淡い期待を胸にオフィスに戻る。

ハイいないー。ガクッ

「谷口お疲れちゃん」

工藤さんが残っていた。

「お前帰ってこないから心配したぞ」

…あざっす。

「たいした話じゃなかったです」

そのたいした話でないことのせいで、俺はこの土日をもやもやした気持ちで過ごさねばならんのか。

パソコンのロックを解除する。

1通のメールを受信しました。

R y o k o S h i z u k i 1 9 : : 0 2

ほんの10分前のメール。

『随分はまっちゃったね。お疲れ様。』

志筑さん。

『ディナーなんだけど、木曜日はちょっと用事があるの。他の日ならいつでもいいよ。』

谷口君の都合に合わせてます。』

あれ？なんで木曜日って分かったんだろ…つか、神様ダメじゃん、嘘つき。

『今日はお先に失礼します、よい週末を。』

志筑』

でも、神様ありがとう。

『 P S : 日にちが決まったらメールをくれると嬉しいです。 』

文章は彼女の携帯番号とメールアドレスが繋がっていた。思いもよらぬ収穫。神様ありがとうございます。

「木曜日なにがあるんですか？」

ぬっと現れたミキティに驚いて、マウスを誤操作する。

メールが消えた。ダアーツ!!!

ああ、xマーククリックしたただけか…ビビッた…

「なんでミキティまで知ってるの？」

ミキティの席は量子さんの隣りだ。

「あんな大きい声で言われたら聞こえますよ」

…だから、志筑さんも分かったのか。

「デートの日にち考えてたの」

ああなるほど、とミキティ。

「そりゃテンション上がりますね」

でも、結局デートは火曜日に決めた。給料日当日。

俺はケーキのイチゴは最初に食べるタイプなんだ。楽しみは早くに来た方がいい。

店の予約も万全だ。

どんとこいつ火曜日!!

谷口の課題（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございます。
感想などありましたら、一言お願いします！

きつこ

谷口の初デート

長い長い3日間を経て、ついに火曜日が来た。

志筑さんはいつもと変わらぬ時間に出社し（多分ね。いつも俺より早い）9時前にはコーヒを飲みながらミキティとおしゃべりをしている。

俺の席からは内容が聞き取れない、それが残念。いつそのことミキティになりたい。

谷口的ファッションチェックをするなら、本日のポイントはスカート！それだけでテンション上げ。志筑さんがスカートで来ることは別に珍しくはないけど…いひひ。

今日はひらひらゆらゆらしたやつ、高級な金魚のしっぽみたいだ。か、かわいい。

今夜は彼女とデートをする。小洒落たお店でイタリアンとワイン。

これぞ女子仕様のデート！

彼女に男がいろいろ、その時だけは俺のもん。

やっべー！

いかんいかん、このテンションじゃ午後まで持たん。

「谷口」

背中をどつかれ、俺はデスクにデコをぶつけそうになった。あぶねえっ！

「なにボサツとしてんだよ。ミーティング始まるぞ」

工藤さんに促され、時計を見ると9時になっていた。彼女とミキティも彼女らのボスのところで輪を作っている。

俺は椅子に座ったまま移動。

「おはよーございまーっす！」

挨拶はコミュニケーションの基本だからね。大事大事。

さあ、仕事だ！夜を楽しむために頑張つて働こう！！

17時を過ぎた頃から俺は警戒し始めた。

今更ながら、デートにこぎつけるまでの道程があまりにも順調過ぎて怖くなった。

『幸せが…怖いのも』っていう意味がなんとなく理解できる。あ、コレはいつぞやの昼ドラで聞いた台詞ね。

そのまま18時も過ぎ、程よいところで仕事を切り上げる。

無事脱出！！！！

志筑さんは大丈夫かなあ…なんて心配は無用。さすがの彼女はきちり時間通りに現れた。

「お待たせしました」

スカートをひらひらさせながら、横断歩道を足早に渡ってくる。

「なんか、お昼と雰囲気が違いますね」

ドキドキしながら言うと、彼女はちよっとはにかんだ。

「谷口君が盛り上がったから、ちよっただけ乗ってみたの」

彼女は目を伏せ、顔をちよっただけ近づける。ホラ、まつ毛がキラキラしてるでしょ？と言った。

まつ毛が濃いんだな…ヤバイ、心拍数上がる。

「い、行きましようか」

肘とか突き出したら、腕組んでくれるのかな。いや、スルーされた時のダメージがでかすぎる。

とか妄想するうちに着いてしまった。

イタリアンというと、もつと家庭的な気楽な雰囲気だろうと想像してたんだけど、なかなかオシャレだ。

ワインさえオーダーしちゃえば後は出てきたものを食べるだけ。

「志筑さんワインはどういうのがいいですか？」

「うーん…今は白ワインな気分かな」

よっし、ワインリストのうち半分は絞れた！

「谷口君は普段は何を飲むの？」

「ビールですかねえ…」

正直に答える。俺はあんまオシャレなお店とか行かないし。

「エビスもあるよ」

ワインの次の次のページを指し示す。爪は薄いピンクで光沢があり、さきつちよがキラキラしている。まるで桜貝のようだ。

「志筑さんの爪、飴ちゃんみたいですね」

彼女はびつくりして手をひっこめる。

「食べませんよ」

「分かってるわよっ」

即切り返してくるも、焦ってる感じがまたかわいい。

「今日はせっかくだからワインがいいんです。ボトルでいいですかね？」

「うん」

で、俺たちはヴィダ・オーガニカ・シャルドネ3、8000円をチョイスした。

「『柑橘類やパイナップル、ハチミツなどのアロマ、絹のようなきめ細かさ。』なんかおいしそうじゃない？」

オーダーをしてもものが出てくる合間、彼女はリストの説明を読んでいる。

「でも辛口なんですよねー不思議じゃないですか？」

「んー…飲んでみれば分かるんじゃない？」

リストをパタリと閉じて、元の場所に置く。

「志筑さんて」

ん？と顔を上げる。俺は笑いながら「O型でしょ」と続けた。

「谷口君もO型だよね、絶対」

絶対を強調する。

「え？なんで？」

「よく分からない味のものも、ひとまず頼んじゃうあたり絶対〇型
あー！」

「なるほど！」

「そこは私も一緒ね」

なんか嬉しい。志筑さんとの共通点。

ほどなくしてワインががやってきた。よく冷やされた白ワイン。ト
クトクと音を立ててグラスに注がれる。

「何に乾杯しましょうかね？」

「そうねえ……」

グラスを持ったまましばし考え込む。お疲れ〜なんて月並みな言葉
では乾杯したくない。

「じゃあ、最近あった『やったー！』っていう出来事に乾杯しまし
よう」

「なにそれ！」

ふふふ、と志筑さんが笑う。

「乾杯！」

「乾杯」

グラスが重なり合い、きれいな音を響かせた。

志筑さんの最近あった「やったー！」な出来事は、前菜に出てきた
プロなんとかっていう要は生ハムと白ワインがぴったりベストマッ
チだったことだそう。生ハムの脂を白ワインがさらりと流してく
れる。

俺は、志筑さんが今日オシャレしてきてくれたことだ、というと「
何浮かれてんのよ」とクギを刺された。痛い…

パスタは2種類から選べて、彼女はビアンコ、俺はボロネーゼを選
んだ。

しかしビアンコにはアサリが乗っていない。

「アサリじゃないんですねー」

と思わず呟くと、お店の人が「ビアンコは白ワインを使ったソース

のことをいうんですよ」と教えてくれた。
よく聞くボンゴレビアンコをイメージしてただけど、ボンゴレの
部分があさりという意味らしい。へええ。
今日のビアンコはトマトのビアンコだった。
ちなみにポロネーゼはミートソースのこと。ふううーん。

「谷口君って、本当素直ね」
改まって志筑さんはそう言う。

「バカにしてるんじゃないの、褒めてるのよ。あまり嬉しくないか
な」

食事は和やかに進み、ワインも2人で1本空けて、最後のコーヒー
を飲みながら彼女はそう言った。

「よく分かんないっす。けど、志筑さんの前で気張っても全部お見
通しだと思っし、疲れちゃうし」

「…疲れちゃうかあ」
もう一口コーヒーを飲む。

その口ぶりが、なんか引つかかった。

時計はまだ9時を過ぎたところだった。

「志筑さん」

俺はなるっただけ笑顔で明るい声で呼んだ。

「もう一杯、付き合ってください!」

お会計を済ませて、すぐ近くにあるブリティッシュパブに入った。
都心ならどこにでもあるチェーン店だ。体を寄せ合わないと、喧騒
に会話がかき消されてしまう。

彼女はジントニックにちよこつと口をつけた。ワインを1本空けて
まだ飲めるんだから、酒には強いんだな、でも頬が少し赤いし喋り
方がスローになってきた。酔いは回ってるみたい。あんまり飲ませ
すぎないようにせねば。

軽く喉を潤すと、彼女の方から少しずつ喋りだした。

恋人についてだ。

知り合ったのは高校時代のこと、付き合い始めてからもう7年くらいになるそう。しかも彼は医者って完璧じゃん、かなわねえ。

「でももう1年あつてないの」

「1年ですか?!」

コクリと彼女は頷く。

「伝染病か何かの研究とかで、アフリカに行ったっきり」

アフリカとはまた遠い…

「医者でもワイルドな分野があるんですね」

「治安だつて悪いのに…人の気も知らないで」

ちよつと怒りのこもつた声。

「だからか」

俺はふむふむ、と納得した。

「なにが？」

「志筑さん、たまに寂しそうな顔するんです」

俺は自信を持ってそう言った。

彼女はあ然とした顔で俺を見た。

「日頃からそんなにじろじろ見てるの?!」

「すいません…」

怒られてしまった…

「謎が解けました。よかつたつす」

彼女はムツとした顔のまま、ジントニックを飲んでいる。怒ってる顔もかわいい。

「今度はいつ帰ってくるんですか？」

「知らない！」

そんなに怒らないでくださいよう…

「帰ってきて欲しいって言えればいいのに」

俺はギネスビールをゴクリと飲んだ。きめ細かな泡と苦味が口に広

がる。

「そう単純にはいかないのよ」

一言言うのに、単純とか複雑とかあるのかな。

「帰ってきて！の一言で済むじゃないですか」

「それが言えないの！！」

あ、怒ってるんじゃない。

「志筑さん、むすくれてる」

ついニヤニヤした声を出してしまった。

初めて、彼女の子供のような表情を見て、嬉しくてつい。

そんな俺を見て、彼女はさらにむううつとする。

俺は我慢できなくなつて、ふふつと笑つてしまった。

おもしろいつ志筑さんおもしろい！！

志筑さんがサツと手を伸ばし俺の右頬に触れた。指先が耳の下を触つて、心臓がギュウツと縮んだ。

「しゅ…」

カツと熱くなる。志筑さんの指が俺の顎のラインをなぞり、俺の身体が硬直する。そして…

ギュウウウウツ

「い、いたひつすよっ」

俺の右頬を、彼女は思いつきりつねる。痛いっ痛いっ

「谷口のクセに生意気なっ」

なんすか、そのジヤイアンの発言は！

志筑さんは力を緩めるどころか、ひねりを加えてさらに絞る。

「ごめんなさひつ生意気言いまひたっ」

パツと手が離れる。右頬がじんじんする。

怖いっ怖いよ志筑さん。涙がにじむ。ギネスを右頬に当てて冷やす。

「谷口君みたいになれたらいいのに…」

彼女はポツリと呟いて、またジントニックに口をつけた。

寂しそうな横顔は、俺の心臓を締め付けた。

谷口の初デート（後書き）

カフェでカフェラテを頼んで、泡にパンダを書いてもらいました。最初はアライグマにしか見えなかったけど、飲んで引き伸ばされるうちに、見事なパンダになりました。

前回はキン肉マンを書いてもらいました。最高傑作です。バリスタ天才！

感想お待ちしております！（本文のね！！）

きっこ

谷口の脳内メーカー

あれから、彼女とはすっかり打ち解けて（というか、彼女が打ち解けてくれて）昼飯や飲みなんかに行く仲になった。

俺は彼女というだけで楽しいし、彼女も寂しい気持ちしが紛れるならいい。

そりゃたまに胸が痛い時もあるけど、まだ憧れの段階でフラれたことで、気持ちの整理がつくのも早かったみたいだ。

彼女は大人で仕事ができて…完璧な女性だと思っていたけど、実際に付き合ってみてイメージが変わってきた。

キレイで大人で仕事ができるのは間違いないんだけど、枝豆を食べるのが早いとか、映画館は見に行くまでがしんどいとか、俺には案外辛口だったりとか、そういう人間くさいところを目の当たりにして、俺が勝手に作り上げていた彼女の人間像に、彼女ははまりきらなくなつた。

彼女への興味は尽きない。

「脳内メーカー？」

志筑さんは首をかしげる。

ランチ時を過ぎた食堂は、人は少ないんだけど人が溢れかえっていた形跡は残る。

「名前でその人の脳内が分かるんですよ」

ミキティが携帯をカチカチいじりながら言う。

ちよつと前に流行った遊びだけど、志筑さんは知らないらしい。

俺はコンビニの熱血焼肉弁当をもぐもぐ。これを食べていると、志筑さんは必ず「野菜が足りない！」と注意してくるので、今日は野菜ジュースも買って来た。

「例えばですね」

ミキティは『渡辺幸三』と打って検索をかける。すると、脳内いっぱい『休』という字が溢れ、それを『H』が囲んでいた。す、すげえっ!!!

「さすがエロ部長!!!」

ミキティはゲラゲラ笑う。志筑さんも「すごい!!!」と目を丸くする。

「ミキティはどーなってんの?」

俺の問いにミキティはニヤツと笑う。

「私のはすごいよ」

な、なんだよ…(汗)

ミキティが見せてくれたミキティの脳内は『食』でいっぱいだ。

「すげー!!!これマジで当たってんじゃねーの?!」

そしてポツンポツンと別の漢字が点在してるんだけど、その字がまたすごい。

「金嘘悪欲って…また濃いチヨイスだね」

「ふふふ」

ミキティは不気味な笑顔で、次を検索。

「谷口：あれ？谷口君って名前なんだっけ？」

「壮でしょ」

志筑さんが即答する。

「…なに？」

微妙な間を気にする。

「名前、知っててくれて嬉しいっす」

志筑さんは顔をちよつと赤くする。かわいい。

そんな感動も、ミキティはあっさりスルー。

「ソウってどう書くのー?」

「あれよ、浅間山荘の草冠がないやつ」

あ、浅間山荘って…

「壮大な自然の壮ですよ」

「ハイハイ」

女子2人は俺を軽くあしらい、携帯を覗く。

「やだっ谷口君」

志筑さんはハツとして口を押さえる。

「こりゃひどい」

ドン引きの女子2人。

なに？なにになに？

携帯を奪い取る。

「あ……」

『遊』が真ん中を走り俺の脳みそを二分している。そして、遊の右は『金』で埋めつくされ、左は『H』でいっぱいだ。エロ部長よりHがいっぱい。

「しょ、しょうがないじゃん、男なんだから！」

しまった、自爆。

「金で遊んでHってー！風俗？キャバ？」

ミキティは追い撃ちをかけてくる。志筑さんの前ではやめるー！

「谷口君、意外」

志筑さんまでそんな…（泣）

「キャバクラはエロ部長の付き合いで一度行っただけど、えらいめにあったからもう二度と行かないと心に決めました」

2人の興味津々な視線に話を続ける。

「やたら濃い酒飲まされまくるし、キヤーカワイイ！って散々ナメられて、部長は機嫌悪くなるし」

もう最悪だ！

「あーそれなら納得！」

志筑さんはめっちゃ笑う。かわいいけど腹立つ。

「谷口君ぼいわ〜」

ミキティには完全に腹が立つ！

「そんな子に風俗は無理ね、ハードルが高すぎる」

志筑さんは妙に納得して、ひとまず俺の言うことを信じてくれた。そんな嬉しくない！！

と、ここでタイムアップ。ランチタイムは終わり、仕事に戻る。

けど、俺は気になってこっさり検索したんだ。

『志筑量子』

脳みそを2つの文字が囲む。『悩』と『休』、そして中は『秘』で
いっぱいだった。

たかがゲーム。だけど、俺は悲しくなった。

谷口の脳内メーカー（後書き）

ちなみに私の脳内いっぱいには『秘』真ん中にポツンと『欲』が1つ。
ミステリアスな女、きっこでした。

谷口、招集がかかる

「それってフラれたのとは違うんじゃない？」

一通り話を聞いたハルが、ズバツと切り込んでくる。

とある日のある飲み屋のカウンター。俺は3杯目のビールも飲み
終え、さすがに焼酎ロックにスイッチ。

ハルは最初からずっと焼酎の水割り。麦、米、芋と攻めている。

彼女は学生時代からの友達だ。ハデ顔美人だし、昔からモテる恋愛
の達人。

職場が近いので、たまに招集がかかり、こうやって2人で飲みに行
く。

酒の肴に恋愛話をせえと言うので、これとってない俺は志筑さん
との関連性を話した。

そしたらこの通り、説教が始まってしまったのだ。

「だってさ、壮はまだ告白してないじゃん」

ナスの漬け物を口に運ぶ。その唇は全くズケズケとものを言う。

「デートに誘ったら、聞いてないのに恋人います宣言されたんだぜ。
それって友達以上は無理って言われてるようなもんじゃん」

痛いところを再確認させられる。

やだやだ、俺はもう友達でいいのに。

「確かにその時は警戒してただろうけどー」

グビツグビツ。

ハルちゃん、ピツチ早いっすよ。

「でもさ、デートって曖昧な言葉よ。今の私と壮も見方によっては
デートになるし」

ええっ？！ハルとデート？

「なによ、不満？」

「滅相もない」

ハルとデートしたがる男なんていくらでもいるだろうに…世の男の

皆さん、本当にすみません。

「壮は少なくとも男として見られてるわけよ。男であればチャンスはある！しかも遠恋中なんて最高じゃない」

グツと拳を作る。強い視線が俺を射る。

「でも志筑さんはそんな流されるタイプじゃないよ」

「でも、だつては言わない！」

ハルはネガティブなコトバが大嫌いだ。

「フラれたと思ってるなら、もう一回くらいフラれたって問題ないでしょ！」

なにその理論。無茶苦茶な…

「壮はさ、いつも相手の気持ちを勝手に測って引いちゃってさ、損してるよ」

いつも目を見て人と話すハルが、すつと視線を逸らした。

それが色っぽくてドキツとする。な、なんだ、今の。

「大丈夫！めった打ちにされたら私が介抱してあげるから。ただし、私がフリーな今のうちよ」

「ハル、別れちゃったの?!」

つい声がデカくなってしまつて、ギツと睨まれる。

「私がフツたのよ」

そりゃ分かりますが…驚いたなあ、もう。

「ハルはさあ、どーゆう男になら満足できるんだろね」

「壮みたいな男」

な!!!

「もーいいよ、そうやってバカにして面白がつてりゃ」

「バカになんてしてないわよ。あんたは本当にいい奴だよ。だから幸せになつてほしいんだつて」

女の人がいう『いい人』つてどんな人なんだろうか。いい人止まりつて言うじゃん? いい人なのに一緒にいたくないのかな。んー分からん! 女から見た男の魅力つてなんだ?

それに、せつかく俺の前ではリラックスしてくれるようになったの

にさ。

「思い切って告ってしまえ〜」

「はいはい」

酔っ払って盛り上がるハルを適当にあしらう。勿論言わないけどな！

金曜日の朝一、会議に行った志筑さんは昼過ぎにようやく帰ってきた。

ミキティがなにやら話しかけ、志筑さんがにこやかに答えて笑う。

ミ「会議長かつたですねー」

志「部長がなかなかOKくれなくて、参っちゃうよね〜（笑）」

みたいな感じかな。は、しまった。2人の会話を妄想してしまった。でも、分かってますよ志筑さん。そろそろ来るんでしょ。

俺のPCにメールが届く。

『件名：召集礼状

時間：19：00 - 0：00

場所：どこか

必須参加者：Sou Taniguchi

もーっ頭きた（怒）

今夜遊びに行きたい。

暇だったら付き合ってくれない？

志筑』

ほらね、やっぱリストレス溜まってた。

しかし召集礼状って…しかも終了が0時って…

チラと志筑を見る。いつもと変わらぬ表情で仕事をしている。

まったく…大人なんだから…

『了解』

どこへでもお供します。

谷口』

夜、鍋の向こうには志筑さんのキラキラした瞳があった。

コーゲンでぷるぷるのスープが、熱でグングン溶けていく。

「すごーい！」

今日のメニューは豚しゃぶ。元々コースしかなくて、豚と白髪ネギが食べ放題だ。

「ストレスと美肌にはブタミンパワーでしょ」

菜箸でネギをたっぷりほうり込む。

「すばらしいよ、谷口君」

実はこうなると予測し、1週間前から予約しておいたのだ。でないといけない人気店だから。

「たんと召し上がれ」

「はい」

志筑さんはロース肉をしゃぶしゃぶ言いながら泳がす。

2人きりになると、志筑さんはちよつと子供になる。それがかわいい。

俺はバラ肉を泳がす。

「バラ肉にはゴマだれがいいですかねー」

「脂っこいから塩もいいんじゃない？」

一言で塩といっても3種類ありますよー。

俺達は食べ放題にかまけて豚一頭くらい食べた。んなアホな！って思われるだろうけど、アホなくらい食べて飲んだ。

「お腹いっぱい、電車乗れない」

志筑さんは上機嫌。よかった、いっぱい笑ってくれて。

「じゃあカラオケ行きますか！」

「行くー！」

終電なんてまあいつか。明日は休みだし、タクシーで送ってあげれば。

「カラオケはこっちよ」

志筑さんが俺の腕をつかんで引き寄せた。

「え？あつちですよ」

俺は適当な方を指す。すると彼女は、俺の腕に自分の腕を絡ませた。

「だってあそこに光ってるじゃない」

あ、本トだ！なんて白々しく言う。

彼女には『腕を組んでいる』なんて気持ちはさらさらないだろうけど、俺の脳内はまさに

「やったー！！」

若干連行されてるっぽいけど、まあいいか。

俺はわざと逃げようとする。すると彼女は逃がすまいとギョウツとしがみついてくる。

「召集礼状は0時までだったでしょ！逃げるなっ」

「逃げませんよ」

そうやってギョウツと捕まえといてほしいだけなんです。

「朝までだつて付き合いますよー」

カラオケの部屋に入る。

これがホテルだったらならんなんて邪な思考がよぎる。いかんいかん。余計な盛り上がりは禁物だ。俺はTHEクリーン・マンだろ。俺くらのクリーンマンが政治家になったら絶対日本は変わるのに。

「谷口君、ガッツだぜ入れるよー」

「任せとけ！」

彼女が寂しくないようにする、それが今夜のミッションだ。ガッツだ俺！

谷口、招集がかかる（後書き）

いくら寝ても、寝れます。
なんででしょ。

きつこ

谷口、お持ち帰る

「次はこれ」

志筑さんは矢継ぎ早に曲を指定してくる。

彼女は俺が3曲歌って、やっと1曲歌うくらいのペースだ。

「志筑さん、疲れた」

元気な曲ばかりチョイスするから、さすがに腹筋が痛い。

もうそろそろ0時を過ぎる頃かな。

「志筑さん、今の時間テレビおもしろいのやってるんですよ」

テレビでちょっと休憩ね、夜は長い。

ワンセグを立ち上げる。データ受信中。

「なにになに？」

彼女はにじり寄り、俺と肩を並べる。心臓がキュツと縮む。心地よい痛み。

映像が映った。ニュースだ。

「あれ？チャンネルあつてるのに…」

画面には『コンザ地区で内紛勃発、日本人巻き込まれ重傷』とテロップが出ていて、

「詳細分かり次第、お伝えします」とアナウンサーが締め括った。

そのニュースを見て、志筑さんは凍り付く。

「志筑さん？」

口許を押さえる指が震えている。テレビは次のニュースを伝えている。

「コンザ地区つて…桜志が行つてるとこ…」

ポツンと呟いた。

「オーシつて…アフリカに行つてる恋人のこと…？」

コクンと頷く。たしかに、映像はアフリカっぽい。

「どうしよう…日本人が重傷だつて！」

志筑さんは動揺して、俺の腕をグツとつかむ。どうしようって言う

たつて…こんな夜中にどうしたらいいんだ？

志筑さんはかばんから自分の携帯を取り出し、手早く電話をかけるが、繋がらないようだ。

「アフリカに繋がらない」

直接電話をしたようだ。

「オーシさんを派遣してる大学だか病院なら分かるんじゃないですか？」

志筑さんはすぐに別のところに電話をかける。

が、こんな時間だ。電話は留守電になってしまったようだ。

「ひとまず、帰りましょうか」

こんなところにいるより落ち着いた方がいいだろう。今の時間ならまだタクシーつかまりそうだし。

俺は立ち上がるうと腰を浮かす。が、志筑さんが俺のシャツの胸辺りをつかんだ。身体をゆっくりと傾けてきたので、咄嗟に支える。

彼女は顔を俺の胸に押し当てた。

な、ななななに？！

「志筑さん？」

顔があつと熱くなる。躊躇しながら、彼女を両腕で包む。でも、ギョツとしていいのか分からず指は宙に浮く。

ん？

彼女は肩で呼吸している。ハツハツと浅い呼吸を繰り返す。

「志筑さん、苦しいんですか？」

顔を覗き込むと、涙目で苦しそうに呼吸をしている。もしかして…

「志筑さん過呼吸持ちですか？」

過呼吸持ちって言葉があるかは別として、彼女は頷いた。

「ちよつと待ってね」

俺は彼女の体を胸で支えながら自分の鞆を手繰りよせる。確か朝めしを買った時のコンビニ袋が…あったあった。

袋の入り口を志筑さんの口に当てる。

「ゆっくり吸ってーはいてー」

過呼吸は最近若い女性に多く見られる。強度のストレスやアルコールなどでも発症する。十分に呼吸しているのに呼吸できないような息苦しさに見舞われ、さらに吸おうとしてしまう。

だから袋をあてがって、自分が吐いた二酸化炭素を吸わせると逆に落ち着くんだ。

「大丈夫だから、ゆっくりね」
優しく声をかける。

彼女の呼吸が大きくなり、次第に落ち着いてくる。そして袋から顔を外し、くたゝとなった。

そつと抱き寄せる。今度はちよつと強くキュツとした。

「帰りますかね」

コクンと彼女は頷いた。

で、半ば抱き抱えるようにしてタクシーに乗ったわけですが、俺は彼女の家なんて知らないわけで…彼女がナビしてくんなかったら、俺んちに行くしかないっしょ？

弱つてるところをつけこんで…とかじゃ全然ないからね！！

つて、誰に言い訳してんだ俺。

彼女をクリーン・マン谷口のベッドに寝かせる。ちゃんと毛布も首までかけたぞ！

そこらに脱ぎっぱなしだったTシャツとハーフパンツを取り、風呂場で着替えた。家ではスウェットなんだけど人前でそれは微妙だし、だからといってジーパンはキメキメ過ぎだろ。ということでハーパン。

スーツをいつもんどこにかけて部屋を眺める（除く：ベッド）
エロ本DVDはなし！女の子の口説き方は押し入れの中へ。サツカ
ー雑誌を絶妙な雑さ加減で積み重ねる。ピツチりきれいにしちゃう
といかにも片付けました！って感じで格好悪い。

煙草の吸い殻やペットボトルや缶を片付け、洗濯物をタンスにしま
いスッキリ感が出た。ファブリーズして、煙草の臭いを消す。志筑

さんは煙草が苦手なのだ。

あとはベッド周りだけなんだけど…チラ見したら志筑さんが寝ていた。

そりゃそーだ、俺が寝かせたんだし。

うーん…

ん…

…

ダ、ダメだ！近づけない！！

俺は煙草を取って、台所の換気扇をつける。

ウーカラカラカラ…

換気扇の動きまでぎこちない。

コンロで煙草に火をつける。前髪を燃やしそうになってちょっと慌てる。

俺は割と背が高いから、一人暮らし用の小さな台所の換気扇なんてすぐ目の前だ。

吐いた煙は一反木綿のようなゆらゆらした軌道を描きながら吸い込まれていく。

なんか…一家のお父さんの悲哀を感じる。

仕事から疲れて帰ってきてても、子供に毒だからと好きに煙草も吸えず、こつやつて換気扇と会話を交わす、みたいなの。

こりやさみしいぞ。結婚したら禁煙しようかなあ…

俺、朝までこんなしょうもない妄想しながら起きてんのかなあ…（泣）

夜はまだまだ明けない。

谷口、お持ち帰る（後書き）

金曜日だ！ワイ

クリーンマン谷口

煙草も吸い終わってしまった…

「寝よ」

毛布を一枚、廊下に敷く。クッションを枕がわりに寝転んだ。狭い廊下にすっぽりはまる俺。ガリバー旅行記か！

あ、でもいい感じに疲れてて、すぐに寝落ちしそうだ。

ベッドに目を向ける。こちらから姿は見えない。けど、布団がポコッと盛り上がっているのを見て、彼女の存在を感じる。

明日朝起きたらびっくりすんだろな！。

『量子さん、意外とエロいんですね』とか言ったらすんげえ慌てるだろうな！。慌てるって見てみたい。

あ、いかんいかん寝るんだった、妄想してる場合ではない。

おやすみなさい、志筑さん。

心の中で挨拶をする。

静かだ。

何かの機械音が聞こえるくらい。

彼女は寝返りどころか、ピクリとも動かない。

静かだなあ…

…

…

…

ガバツ！

突然志筑さんが起き上がった。ひいっ！

あまりに突然で、俺の心臓が縮み上がる。だってゾンビみたいだったんだもん！！

志筑さんはベッドから転げ落ちるように出てきて、鞆の中をガサガサする。

「もしもしっ」

携帯を取り出した。

「大丈夫なのね」

少し間を置いて、安堵の空気が流れた。

オーシからだ。無事だったんだ：よかった。

クッションを抱えたまま、俺は彼女の手元をボーツと見ていた。携帯をにぎりしめる右手はギュツと力んでいて、大事そうに左手を添えている。

「：え？何言ってるの？また暴動が起きたら：でも」

微かにオーシさんの声が聞こえた。まだ帰れないって。

彼女は泣きそうな顔とは裏腹に、冷静な声で「分かった、気をつけてね」と言った。

俺の脳血管がプチツと音を立てて切れた（ような気がした）

クッションを投げ捨て、彼女の携帯を奪い取った。志筑さんは心底驚いた顔で、俺を見上げる。

「おめえな、帰れないってどーゆうことだよ?!」

志筑さんは慌てて携帯を奪おうとする。けど、こっ見えて俺、身長180オーバーなんで、立ち上がって手を挙げれば、女の子の手なんて届かないんです。

「志筑さんが毎日どんな思いでいるかちょっとは考えてみるよっふざけんなっ」

ツーツー

「って、電話切れてるし!!」

オイコラッ俺はまだ言い足りねえぞオーシ!!

「谷口っ」

志筑さんは怒り口調だ。携帯をもぎ取る形相は相当お怒りだ。いつもの調子でうっかり謝りそうになる。けど、今の俺は悪くない。

「自分が言わないからいけないんだろっ!」

ついキツイ口調になってしまった。志筑さんはビクツとする。しまった。叱るつもりはなかったんだけど…。

「そうやって強がり言うからオーシさん帰ってこないんですよ」
今度は心がけて優しい口調で言った。

志筑さんの目にたまった涙はこぼれる寸前で、俺は手を伸ばした。
今度は遠慮なく、ギョウツと抱きしめた。

「もつと自分の気持ちに大事にしてほしいんです」

だから、俺も素直になる。小さい志筑さんをギョウツとして、髪に顔を埋めた。俺の煙草の臭い、ついちゃってたね、ごめんね。

彼女はグツと全身に力を入れて、泣くのを我慢している。顔見えな
いんだから、泣けばいいのに。

彼女の肩に手をかけて、ゆっくり体を引き起こす。

「志筑さん」

呼ばれて一瞬顔をあげた彼女と目が合う。が、すぐに俯いてしまう。

「しーづきさん」

もう一回、ちよつと明るめの声で。

また顔を上げてくれた。

「好きです」

ちゃんと言えた。自分の言葉で、目を見て。

ポロリと彼女の目から涙がこぼれた。その涙にキスをする。しよつ
ぱい。

そして唇に。

下唇に、口角のところに、そして首に。

彼女の力がフツと抜けた。身体を預けてくる。俺は彼女をゆっくり
ベッドに寝かせる。

そして、想いを刻むように彼女の唇に何度もキスをした。

目が合うと、今更だけど気恥ずかしくなる。ついニコツと笑ってし
まった。

志筑さんはゆっくりと右手を挙げて、手の平で俺の左頬をそつと触
る。

その手の平を取って、指先にもキスをした。

でも…

俺もベッドに寝転がり、隣にいる彼女ギュウツと抱きしめた。
苦しいのか、彼女は腕の中でもぞもぞ動く。
自然と涙がこぼれた。

「たにぐち、苦しい」

「ちよつとだけ我慢してください」

彼女は素直に我慢する。動かず、俺に身体を預ける。

ごめんね、泣き顔だけは見られたくないんだ。

彼女の頭を喉のところに軽く押し付け、抱きしめる力を緩める。

涙を拭い、覚悟を決めて彼女の顔を見た。

彼女は心配そうに俺を見上げた。

「チユウしちゃいましたね」

わざとおどけて、微笑む。

「しかも朝帰りですよ、志筑さん」

もう一度、キユツと抱きしめる。

「せつかくの土曜日ですし、もちよつとこのまま寝ましょう」

腕の中で、彼女は微かに頷いて、俺に抱きついた。まるで子供みただい。

彼女が素直に甘えてくれると、嬉しい気持ちと苦しい気持ちが手を繋いでやってきて、俺の中でバタバタ暴れる。

そんなに騒ぐな、彼女が起きちゃうだろ。

彼女の気持ちがあった気がした。

本気で好きになると、自分のことより相手を優先してしまうんだね。

だから、オーシの前では強がっちゃうんだね。苦しいだろうね。

いつの間には朝の気配、白い光が細く部屋に忍び込んでいた。

今はもう意地張らなくていいよ、眠ろう。

おやすみなさい、志筑さん。

クリンマン谷口(後書き)

うひー恋愛小説って難しいっすね。

あーっ

谷口の新婚さんいらっしやーい(妄想)

おはようございます、谷口です。

目が覚めたら、俺の腕の中で志筑さんがまだ眠っていた。すーすーと小さな寝息が聞こえる。

よかった…

なんだかホツとして、ちょっと起こした頭をまたベッドに倒した。壁にかけてある時計がもう13時を指している。日は高く上っているんだろっ、ちよつと暑い。

それでも腕の中のぬくもりが心地よくて、俺はまたキュツと抱きしめた。

これから、俺はどうするんだろっ。

うまく志筑さんをあきらめられるのだから…それとも、頑張って振り向かせるか？

いまいちピンとこない議題だった。

志筑さんをどーしたいとか、こーしたいとか、思い浮かばない。

だから、考えるのをやめて、今手元にあるこのぬくもりを、大事にすることにした。

しばらくボーツとしていると、腕の中のぬくもりさんがゴソツと動いた。

「おはようございます」

ぬくもりさんにご挨拶。

「…おはよう」

俺がニコツと笑うと、志筑さんはちょっと恥ずかしげに俯いた。

「もうこんにちはの時間ですよ」

「よく寝た」

俯いたまま、小さな声でそう言う。

「なんで下向いてるんですか？」

体を離して顔を見ようとすると、彼女は俺のTシャツをひっぱって

顔を隠す。

「だって…」

もぐもぐ。

「顔、メイク崩れしてるもん…マスカラよれよれでしょ」

その言葉に俺は思わず吹き出した。なんてかわいいんでしょ！かわいすぎるでしょ志筑さん！！

「大丈夫ですよ！顔を上げてください」

「やだ」

やだって…子供ですか。彼女をもう一度抱きしめる。

「志筑さんのことだから、俺が寝てるうちに消えちゃったりするかと思いました」

鏡に口紅でByeとか書かれたら、峰不二子か！！とか突っ込むとこだったよ。

「そんな不義理なことはしません」

志筑さんって言うこと面白いよね。

「谷口、お風呂借りてもいい？」

「あ、はい。ちょっと待っててください」

ベッドから降りてバスルームへ。ゴミとか髪の毛とか落ちてないかチェックして、新しいタオルとTシャツとハーフパンツを用意する。さすがに女子の下着は用意してない。

「どーぞ…！」

「ありがとうございます」

志筑さんは丁寧にお辞儀をしてバスルームに入る…前に立ち止まって

「のぞかないでよ」

と注意を促した。

「のぞかないですよ！」

「ムラムラ妄想も禁止！」

「そのくらいは許してくださいよ…」

志筑さんはダメとクギを刺して、今度こそバスルームに落ち着いた。妄想禁止か…チエツ

ならば心を落ち着かせるしかない…テレビをつける。そして、カーテンとガラス戸を開ける。案の定、外はいい天気だ。こもった空気を入れ替えれば、ムラムラも爽快！と思ったけど、かすかに聞こえるシャワーの音は俺の性欲を掻き立てる。これはいかん…換気扇のスイッチを入れ、煙草に火をつけた。ふひー。

そんなこんなして過ごしていると、15分ほどで志筑さんが出てきた。淡い期待とウラハラに、彼女は昨日着ていた服をそのまま着ている。そしてメイクもされていて、職場で会う志筑さんそのものだった。

「これ使わなかった、ありがとうね」

「いえ」

返されたTシャツとハーパン、ほんじゃ俺が着るか。

「俺もシャワー浴びて着ていいですか？」

「妄想しないならいいよ」

ぬぬう…努力します。

しかし実際は妄想する暇はなかった。だって、この間に帰られちゃったら悲しいじゃん。もちよつと一緒にいたい。

パンツと浴びて、ガガガツとひげをそつて慌てて出る。

志筑さんは小さな台所でトントんとネギを切っていた。

「勝手に使わせていただいてまーす」

「あ、はい」

ご飯を作ってくれているようだ。ってことは…志筑さんの手作りご飯を食べれるってことじゃん！！

なんと…幸運！

ウキウキ心を躍らせて冷蔵庫を開ける。ビールの缶を取り出してプシュツと空ける。

「志筑さんもどーぞ」

「昼からビール？」

志筑さんはキョトンとして、俺を見上げる。

「風呂上りのビール感覚で無意識に開けちゃいました」
「では、いただきます」

彼女はグラスを受け取ってくれた。そしてカンパニー。
2人でビールを飲む。んーしみるねえ幸せだねえ。

「うまいっすねー！」

「そうっすねー」

あはは、と笑ってくれた。

いやーいい休日だ。休日のお父さんモードの俺は、料理が進む音を聞きながらテレビの前に座りくつろいだ。

新婚さんみたいじゃん、へへっ。

「谷口君」

フイに呼ばれて振り向くと、台布きんが飛んできた。瞬時にキャッチすると志筑さんが感心して拍手してくれる。

「もうできるから、テーブルふいて」

はーい。

「お箸だしてー」

はーい。

「コレ持ってってー」

はーい。ってウヒョッ！うまそーじゃーん！！

全てを運んで、2人でテーブルの前に座る。

「お昼ご飯作るつもりだったんだけど、ビール開けちゃったからおつまみ風に変更しました」

メインは豚とキャベツの炒め物。もやしとワカメのナムル。長いものを切って焼いてコシヨウを振ったやつ、そして冷奴。

「即席でこんなに作れるなんて…感動してます俺」

そっか：志筑さんは料理が出来るキャリアウーマンだったのか…

「どれも手抜き料理なんだから…大げさよ」

彼女はそう言っただけに。あゝ俺はいい奥さんをもらったな！。

(大勘違い)

「いただきますっ！」

「どーぞ」

まずは豚から。やわらくなっているキャベツも一緒にたっぷりとして口に放り込む。肉汁と味付けの味噌の甘みがじゅわくと広がって、ビールビール！

ただのもやしも、ちょっとゴマ油であえるだけで、こんなおつまみになるんだー。

「うまいっす、志筑さん」

「よかった」

俺も本当によかった！こんな幸せな時間をもらえて。

「谷口君って、ちゃんと自炊してるんだね。男の一人暮らしでこんだけの食材が揃ってるってすごいよ」

「俺、学生の時ビンボーだったから自炊命だったんですよ。その名残りで、今でもちよこちよこやってるんす」

「そうなんだ」

実は、今日もお好み焼きを作ろうと思ってそろえた食材だったりする。それが見事に分割されて、こんだけのメニューになって…素晴らしいよ志筑さん。

調子に乗ってビールも2本目突入。あざーっす！

「本当美味しそうに食べるね」

しばらく志筑さんは自分の箸を休めて、ポカンと俺を見ていたが、そんなことを呟いた。

「うまいっすもん」

ニヘラ〜と笑ってしまっ。

「オーシさんはうまそうに食べないんすか？」
ん…と志筑さんは唸る。

「なんか真剣な顔して食べてる」

「真剣な顔??」

うん、と頷く。

「気難しい顔」

あら〜…

「それは微妙ですね」

「すっごく微妙！」

オーシめ、ますます贅沢者だ。許せん。

もー志筑さんもオーシの相手なんてやめて、俺に乗り換えちゃえばいいのに。そしたら楽になるのに。

そーだ！絶対に俺の方がいい！！酒の勢いもあり、急に俺はテンションが上がってくる。

「志筑さん、俺思っんスけど…」

ピコリンとテレビから音がする。ニュース速報。

『ゴンザ地区邦人、外務省より退去命令』

退去命令…ってことは…

「志筑さん！帰ってくるんじゃないですか？！」

「…うん」

志筑は箸をお皿に伸ばしたまま固まっている。

「帰ってくるんですよ！よかったじゃないですか！」

もう一度言つと、やっとこ事態が飲み込めたのか、志筑さんの目から涙が溢れてきた。

ティッシュを3枚ほど抜き取って、涙をぐしゅぐしゅっと拭いてやる。

「よかったですね」

志筑さんはうんつと大きく頷いた。そして、最高の笑顔を見せた。

というわけで、結局乗り換えちゃいなよ計画は失敗に終わったわけ
で…

俺はヘタレ確定。

志筑さんが幸せになればいいんだ。だけど、苦しい。向日葵のように鮮やかな笑顔だった。

谷口の新婚さんいらっしやーい(妄想)(後書き)

久々の投稿です。話はもちよっと続くよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3496e/>

谷口社の奮闘

2010年12月26日14時19分発行